

「道で話しておられたとき」

ルカによる福音書 24章 13～35節

2022年7月31日 高知教会聖日礼拝

愛南教会 矢野敬太

今日は高知教会の皆様と共に、礼拝を守る機会が与えられましたこと、心より感謝します。与えられました聖書箇所は新約聖書・ルカによる福音書 24章 13～35節です。

13節に「ちょうどこの日」と記されています。この日とは、イエスさまが復活された日、イースターの日です。十字架で死なれたイエスさまは、それから三日目、週の最初の日の朝早くに、復活されました。

その復活されたイエスさまは、今も生きて私たちと共に歩んでくださっている。このことを、与えられた聖書箇所と、私の仕えております、愛南教会の歩みとを通して、今日、高知教会の皆様と共に、御言葉に聴いて参りたい。そう願います。

さてイースターの日のはじめの出来事です。イエスさまの二人の弟子が、エルサレムの都から60スタディオン、約10km離れたエマオという町に向っておりました。二人の弟子たちは、ここ数日間起こったこと。つまりイエスさまが彼ら弟子たちと一緒にエルサレムの都に入ったことや、イエスさまが逮捕されたこと。そして十字架で死なれたことなどについて、ぼつりぼつりと語り合いながら、歩いていました。そうして語り合いながら歩いている二人に、復活されたイエスさまご自身が近づいて来られたんですね。そして彼らと一緒に歩き始めたんです。ところが、二人の弟子はそれがイエスさまだろは気づきませんでした。16節に「二人の目は遮られていた」と記されています。イエスさまは十字架で死なれました。ですから、今、生きて彼らと共に歩んでいる人が、イエスさまだとは、二人の弟子たちは、思いもしなかったのです。イエスさまは死なれた。その事実が二人の目を遮り、復活されたイエスさまを見えなくしていました。

語り合いながら歩む二人の会話を聞きながら歩んでいたイエスさまは、二人に問いかけられます。「歩きながら、やりとりしているその話は何のことですか。」この問いかけに二人の弟子たちは立ち止まりました。その時の二人の顔は暗かった、と記されています。暗い顔。そして暗い気持ちで、彼らはエルサレムからエマオへと向かっていたのです。その二人に、「何を話しているのか」問いかけられるイエスさま。二人のうちの一人、クレオパという名の弟子が、イエスさまに答えます。

「エルサレムに滞在しているながら、この数日そこで起こったことを、あなただけにご存知なかったのですか。」

この数日エルサレムの都は、イエスさまの処刑の話でもちきりだったのでしょう。それを知らない、とは。そんな思いだったのでしょう。その二人の気持ちを知ってか知らずか、その人、イエスさまですが、その人は「どんなことですか」と問うたのです。そこでクレオパは、この数日、エルサレムの都で起こったこと、そして今、二人が語り合い、論じ合っていることについて、イエスさまに語ったのです。それが19節以下に記されています。

三日前のイエスさまの十字架の死について語ったクレオパは、なぜ、このことが彼らの顔を暗くしているのか、自分自身の口で語るのです。クレオパたちは、イエスさまを力ある預言者だと思っていました。イエスさまのことをメシア、王と期待していました。それなのに、イエスさまは殺されてしまった。イエスさまの十字架の出来事。それは、クレオパたちにとって、全ての希望を失う、そういう出来事でした。イエスさまへの期待。それはイエスさまの十字架の死によって、すべて潰えてしまったのです。イエスさまへの期待を胸に、エルサレムの都へイエスさまと共に入ったのは、丁度一週間前の出来事でした。それが、今、クレオパたちは暗い顔をしてエルサレムを後にしたのです。希望に満ちて入ったエルサレムから、絶望を胸にクレオパたちは立ち去っている。それが、今のクレオパたち二人の道程でありました。

さらに二人には、到底理解できない出来事が、この日、起こりました。イエスさまのお墓に行った女性たちが、イエスさまの遺体が墓になかったことを知らせました。さらに女性たちに天使が現れて「イエスは生きておられる」と告げた、と。そして他の弟子たちも、イエスさまのお墓が空っぽであることを、見たと。イエスさまが生きておられる。この一連の出来事を聴いた後も、クレオパたちの顔は暗いままでした。イエスさまが復活された。その知らせも、彼らの顔を明るくしなかった。それは、死んだ人間が生きているはずがない、そう思っているからです。これらの報告は、ただただクレオパたちを戸惑わせるだけで、立ち上がる力を与えなかったのです。

そうしたクレオパたちに向って、イエスさまはこう仰いました。

「ああ、物分りが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」

ああ、物分りが悪く、心が鈍い。分かっていない。イエスさまは、そう仰いました。イエスさまが、十字架で死なれた。メシア、救い主としてイエスさまにかけていた、全ての期待は無くなった。そう暗い顔で、絶望している二人に、イエスさまは、聖書を読んでみよ。預言者たちが、ご自身のことをどう語っているか、思い起こせ、と。聖書、ここで言う聖書は旧約聖書ですが、聖書の語るメシアは、イエスさまが受けられた十字架の御苦しみを受けて、そして栄光に入る、そう記されています。彼らが、絶望しているイエスさまの十字架の御苦しみと死は、それは、聖書には、それこそが、メシアとしての栄光への道なのだ、と。そう仰ってイエスさまは、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体に渡って、イエスさまご自身について書かれていることを、二人に説明されたのです。二人は預言者たちの言ったこと全てを理解していない。ならば、その全てを改めて、私が語ろう。聖書全体に書かれている、イエスさまご自身のことについて、イエスさまは二人と共に歩みながら、一言一言、二人に語りかけられたのでした。

そうこうしているうちに、二人の弟子たちが目指していた村に到着しました。しかし、イエスさまは、二人と別れて、さらに先へと進もうとされたのです。二人は、「一緒にお泊りください」とイエスさまに、頼んだのです。もっと話を聴きたい。もっと、この人と一緒にいたい。二人はそう思ったのでしょう。「無理に引きとめた」と記されております。

三人は宿屋で夕食のテーブルを囲みました。イエスさまは夕食のパンを手にとられ、感

謝の祈りを捧げられ、そして裂いて配られました。その時です。二人の目は開かれた、と記されています。イエスさまの弟子として、何度も食事を共にしてきたのでしょう。何度も、イエスさまの食前の祈りを聴き、そして、イエスさまの裂かれるパンを食べてきた彼らです。イエスさまの食前の祈りとパンを裂く仕草、その時、はじめて彼らは、一緒に歩いていた方がイエスさまであったことに気付いたのです。その時です。イエスさまの御姿は二人の目の前から見えなくなったというのです。そのときになって二人は、道で起こったことに、気付いたのです。そしてこう語り合いました。

「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか。」

暗い顔をしながら、とぼとぼと歩いていた二人の心を燃え立たせたもの。それは、道々イエスさまが語られる聖書の言葉だったのです。二人は共に歩んでいるお方がイエスさまだとは気付かなかった。でも、イエスさまの語られる御言葉を聴いて、心を燃え立たせたのです。二人にとっては絶望でしかなかった、イエスさまの十字架の死。そのご自身の十字架の死について、聖書はどう語っているか。そのことをイエスさまは指し示されたのです。それを聴いて、二人の心は燃えたのです。イエスさまの十字架の死。死はすべての終わり、普通そう思います。でも復活されたイエスさまが二人に語りかけられた、聖書の言葉は、全く異なる光を、十字架に当てたのです。絶望でしかなかったイエスさまの十字架の死は、栄光であり、命の始まりである、復活に至る扉だったことを。イエスさまは示されたんです。

そして、二人の弟子たちは、そのことを、イエスさまの十字架の死が復活の栄光に至ることを、ここで初めてイエスさまから聴いたのではありません。まず、イエスさまご自身が、三度に渡って弟子たちに、ご自身が苦しめられ、殺され、そして三日目に復活することになっていることを語っておられました。そして聖書の言葉もここで初めて聴いたのではない。彼らは何度も聖書の言葉を聴いていたはずです。でも、そうしたことを、吹っ飛ばしてしまう程に、イエスさまの死の絶望が大きかったのです。死んだら終わり。それが世の常識です。死の向こうは何も無い。それほどに、死の力は大きいんですね。その死の力の前に希望を失い、暗い顔をして歩む者たちに、イエスさまは寄り添い、共にその歩みを歩みつつ、その現実、死の現実と全く違う方向から、聖書の方から光を当ててくださる。聖書の御言葉を語り開けてくださる。それが復活されたイエスさまが、このエマオへの道なされたことです。

二人は、イエスさまの御姿に気付かなかった。気づかぬままに、イエスさまの御言葉で心が燃えあがりました。そしてイエスさまは、二人のもとを去って先に進もうとされた。二人が引き止め、留まられましたが、イエスさまはなお先に進もうとされました。それは、イエスさまは二人に対する役目は終わったと確信されたからだと思います。イエスさまがなさったことは、御言葉を通して、彼らを絶望から希望へと導くことでした。御言葉によって全ての終わりの死が、復活の命に至ることを確信させることでした。

そして、二人のためにイエスさまが、御言葉をもって臨まれたこと。それは、二人の弟子たちに起こったことであり、同時に、私たちにも起こることなのです。代々の教会が復

活されたイエスさまによって受ける恵みを、二人は最初に受けたのです。私たちは、イエスさまの十字架の死と、その復活を信じています。だから、バプテスマを受け、今教会に集っております。そうした私たちが、この二人のように暗い顔をして歩む。そういう日々を過ごすことがあります。現実に出会う苦しみや悩みに押しつぶされそうになる。そうした私たちの歩みは、まさにエルサレムからエマオに向うクレオパたち、二人の弟子たちと同じ歩みに於いて、起こるのです。そして今、私たちにイエスさまが寄り添って、共に歩いてくださる。二人の目が遮られてイエスさまとは分からなかった。私たちの目にも、イエスさまの御姿は見えません。でも、聖書を通して語りかけられる、イエスさまの御言葉によって、私たちの心が燃えあがる。絶望が希望に変わる。そうした歩みを私たちは歩むのです。

私たち愛南教会は以前は城辺教会という名で歩んでいました。その城辺教会が私を招聘したのは1997年のことでしたがその前、5年間は無牧でした。当時、高知分区の宿毛栄光教会におられた大串眞牧師が、分区を超えて代務をしてくださいました。城辺教会と宿毛栄光教会は車で20分くらいで、分区は違いますが、一番近い教会でした。大串牧師の代務の期間、大串先生の他、当時・須崎教会の黒田若雄先生と近永教会の芦名弘道先生の3名が説教に来てくださいました。その中のある牧師が初めて城辺教会の講壇に立たれたとき、「この教会は無くなる」と思ったと語ってくれました。教会員は6名で、人数が少ない上に、その6人の仲が良くなかった。つまり教会がバラバラだったんです。この先どうすればいいのか、まったく先が見えない。今日の二人の弟子たちのように、暗い顔をした少数の信徒たちが礼拝していました。そして3名の先生方も、それに対する有効な手段はありませんでした。うつむいた顔上げる方法、暗い顔を明るくする術をだれも持っていませんでした。ただ週毎に礼拝をするしかなかった。そう先生方は私に教えてくださいました。ただただ、その最中で、一緒に聖書の語る御言葉を、城辺教会の信徒たちと共に、牧師もまた聴くしかなかった、と。そうして1年、2年、次第にうつむいていた顔が上がってきたのです。暗い顔が輝いてきたのです。そして教会の中から、こういう声が上がってきたのです。「教師を招聘しよう」と。御言葉を聴く喜び。これを町のキリストを知らない人に伝えたい。その願いが宿ったのです。

当然そのためには、さまざまな課題がありました。当時、会員は8名に成っていました。その内、3名は家族（お父さん、お母さん、高校生の娘）でした。互助を受けるとはいえ、城辺教会が責任を持つべき自給額を満たすのは簡単ではありませんでした。追い打ちをかけるように会堂と牧師館が老朽化委とシロアリの被害で使えなくなりました。信徒の家で礼拝をするようになりましたが、牧師が来ればアパートを借りなければなりません。牧師招聘後の予算は百万円の増額が必要でした。代務の大串先生は、無牧期間に説教者を派遣した教会を中心とした援助体制を作ろうと考えていました。しかしその案は、城辺教会の信徒たちに退けられました。その百万円は自分たちで満たしたい、と。ある人は、「これから牧師と共に歩むのだから、これは自分たちで担いたい。イエスさまの追われた十字架を、私も負いたい」と仰っていました。代務者の大串先生は、自分の方がとまどったと言われ

ました。正に、うつむいて、暗い顔をしていた信徒たちの心が、御言葉の力によって燃えた時でした。そして燃え出して、止まらなくなったのです。

ただ礼拝するしかなかった。そしてただ、城辺教会は、ただただ御言葉を聴いたのでした。ただそれだけでした。聖書を通して、説教者を通して与えられる御言葉を、聴くのみだった。エマオ途上の弟子たちと、復活されたイエスさまが共に歩まれました。そして聖書の御言葉を語られました。この時も、イエスさまは聖書を通して、そして教会を通して、語りかけてくださり、輝き得ぬ暗い顔が輝きました。人数とか、現実は変わらなくても、御言版によって、信仰の決断が与えられた出来事でした。

そうして招聘されたのが私でした。最初はアパートに住み、後に一軒家の借家が見つかり、会堂・牧師館として用いました。先に城辺教会としては退けましたが、その教会の決断を尊重しつつ、城辺教会の課題は一教会の課題ではない。四国西南端地域全体の伝道の課題と受け止めた五つの教会に城辺教会自身を加え、四国西南地区伝道協力委員会が組織され、城辺教会の借家の家賃を支えてくださいました。多くの支えを実感しました。転入者も与えられ、また転居に伴い、出ていかれる方々もありました。この時期、3名の受洗者も与えられ、多くの恵みを見せて頂く時でした。一方で借家のまま、なかなか次の段階、土地購入、会堂建築に向って前進できない時でもありました。私自身は先に申した通り、やる気に満ちた教会に来ましたから、次の課題もすぐに進むと思っていました。しかし、なかなか前へ進まないのです。候補地が与えられても、決断が出来ない。私の招聘の時は一致していた教会が、次の大きな課題の前に、意見が対立して行きました。最初に申した仲たがいが再燃したのです。どうしても先に進まない。先が見えない。永遠にこのままなんじゃないか、借家から出られないんじゃないか。誰よりも、牧師の私自身の顔がうつむいてきて、暗くなっていたと思います。そうして7年の時が過ぎ、援助があるとはいえ、家賃の支払いも厳しくなっていました。そしてある時、大家さんから借家の家賃の値上げの申し出がありました。その後、いろいろあって2005年2月のこと、5月末までに借家から出てくれと大家さんに言われました。そう言われても、どこへ行けばいいのか分からない。牧師自身、どうしてもいい分からない中で、臨時役員会を行いました。その時は3名の信徒役員でしたが、皆口々に言いました。「先生、出ましょう」と。行く先を知らずして、でも出て行く決断を迷いなく、3名の信徒役員はしたのです。どうしても決断できなかった教会が、追い詰められたそのとき決断したのです。私自身が教えられました。私は7年間、何も起こらないと思っていたのです。でも、実は、私も教会も御言葉に聴き続けていたのです。聖書を通して、そして新任教師のつたない口を通して、ずっとイエスさまはイエスさまは語り続けておられました。なぜ、追い詰められたところで、行く先を知らずして決断できたのか。牧師招聘の時と同じです。御言葉を聴いた。それしかない。

そしてそれを私に、くっきりと示す出来事がありました。大家さんからの、借家を出て欲しいという手紙が入っていた郵便受けに、もう一通、葉書が入っていました。それはある隠退教師からの葉書でした。そこには、毎朝、聖書を読んで祈っているのだけれども、今朝私と城辺教会のために祈っていて、四だ聖書箇所にこう記されていたというものでし

た。それは出エジプト記32章34節でした。

「見よ、わたしの使いがあなたに先立って行く。」

モーセに与えられた神さまの御言葉です。いついかなる時も、目には見えないけれど、神さまの御使いが先だって、行くべき場所に神さまの御心の場所に、連れて行ってくださることを、御言葉が私に示してくれました。行く先は分からない。何もない。ただ御言葉のみが与えられた。そう思いました。

そしてその後、道が開けたのです。その後、銀行から示された競売物件のレストランに入札し、落札しました。決断できない、それが深刻な課題でした。それを、追い詰められた。正に尻に火が点くという形で、主は開かれたのです。正に、神の御業を見ました。復活されたイエスさまは、確かに生きておられる。姿は見えないけれど、私たちと一緒に歩いていてくださいました。自分で何とかせねば、そういう思いに目が閉ざされていた私たちに、イエスさまは、語りかけ続けていてくださったのです。そうして、私たちは信仰の決断をさせていただいた。それは、その私たちの信仰は、イエスさまが、ずっと語り続けてくださった、イエスさまの御言葉の力だったのです。

エルサレムからエマオへ向かっていた二人の弟子たち。その二人が、共に歩んでおられた方を復活されたイエスさまであることに気付いたのは、パンを裂かれた、その時でした。イエスさまと寝食を共にしていた彼らには、それがしるしとなりました。その時、彼らは、イエスさまが復活されたことを知りました。ただ、その前に、彼らの心は燃えていました。そのことを、二人はここで思い起こしたのです。そして二人が引き止めなければイエスさまは先に進んでおられた。イエスさまご自身は、語るべきことは十分語った。彼らが立ち上がり、歩んで行く力を、もう十分与えた。そう思われたのです。復活したイエスさまが二人に与えたかったもの。そして与えられたもの。それは、聖書の御言葉でした。イエスさまは、聖書の御言葉を語られることを通して、二人の心を燃やされたのです。

それは私たちも同じです。私たちは、聖書の御言葉を聴き、イエスさまの復活を信じて、バプテスマを受けました。しかし、先に申しましたように、目の前に起こってくる出来事に、顔が暗くなり、うなだれることの連続です。そうした私たちに、復活されたイエスさまは、今も生きて、聖書を通して、教会を通して、語りかけ続けておられるのです。「ああ、物分りが悪く、心が鈍く聖書の御言葉をすべて信じられない者たち。今、あなたが見ている現実、絶望している現実について、聖書がどう語っているか、聴いてみよ。聖書の御言葉の光の下で、もう一度その現実を見てみよ」と。目に見える現実が、イエスさまの語られる聖書の御言葉の光に照らされて、全く異なる光を放つ。イエスさまの示される御業を見せていただく。2千年前のイースターの朝に復活されたイエスさまは、確かに生きておられる。今、私たちと共に歩んでくださり、御言葉を与え続けていてくださること。このことを確信しながら歩む。それが私たちの、信仰の道程なのです。

祈りましょう。